東の国々

―「東国万葉」序説―

瀬古　確

一

東歌は遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸等の東海道の国々と、信濃・上野・下野・陸奥の東山道の国々とを基準として分類せられている事はその相聞歌の分類に見るも明かであるが、その前に東歌として載せられている五首は雑歌の項目を脱落したものと思われるのである。そこにも上総・下総・常陸の歌と、信濃の歌とを各一・二首載せているばかりでなく、相聞の次に配せられた譬喩歌にも遠江・駿河・相模の歌と上野・陸奥の歌の載せられているのを見ても、相聞の序列によっていることは確かである。

武蔵国の東山道から東海道に編入せられたのは山田孝雄博士の説かれた通り宝亀二年であったにしても何故武蔵の国の歌を改めて東海道に入れねばならなかったのであろうか。万葉集には後人の手の加っているのを認めるとしても、武蔵の国が山道から海道になったからと言って、わざわざその歌の配列までを改変せられねばならないとは到底考えられないのである。

武蔵国がまだ山道であった頃にも、東山道に下る官人の東海道を旅する者のあった事は上野国守田口益人の駿河を通って

蘆原の浄見が埼の三穂の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし（巻三・二九六）

昼見れど飽かぬ田子の浦大君の命恐み夜見つるかも（仝二九七）

などの如く三穂の浦や田子の浦の好風を賞しているのによっても明かである。

又常陸の官人であったと思われる高橋虫麿が下総の真間の手児奈の歌（一八〇七、一八〇八）をものしているのも、或いは常陸への往路か帰路かに海路を取らずに武蔵と下総とを通過したもの――今日のようにレジャーのため他国に遊ぶなどは絶無の時代である――と考えられるのである。

即ち武蔵の東山道に属していた時代にも海道の人々も此処を通った事もあるので、東歌の配列もたまたまそれに拠っているものとも考えられるのである。

それは兎も角防人等の歌は遠江国をはじめとして、相模国・駿河国・上総国・常陸国・下野国・下総国・信濃国・武蔵国の歌を収録しており、東歌の配列の順序には従っていないけれども、之は防人部領使から入手するに従って記載したものだからである。家持がその載録に如何に熱心であり、よく防人歌の本質を把握していたかについては、防人歌の間に鏤められた彼の防人の悲別の情を詠じた幾首かの長反歌に繰り返されているのに見ても明かである。

防人歌も東歌も共に東国の人々によって詠まれたものである。

東歌の国名によって分類せられているのと同じく防人歌も又国によって一括せられている。そこには当然東の国々を同一の基盤としているのはもとよりである。

しかし東歌が作者不明であるのに対して、防人歌には一々作者名を記したものが殆んどである。

防人歌に一々作者名を記してあるからと言っても、他の巻の作者と全く同じものとは考えられないのである。し

かし東歌に作者が記されないのに、防人歌に作者の明記せられていることは、同じく民謡の世界を背景としながら、後者がそれから一歩でも踏み出そうとすることを物語っている。民謡から文学の発生する最初の姿を防人歌に認めずにはおられないのである。

二

先ず遠江の国の東歌を見るに、相聞に二首譬喩歌に一首（三四一九）あるが、後者には意味未詳の語句を含んでいるので、前者だけを眺めてみると

あらたまの伎倍（きへ）の林に汝を立てて行きかつましじ眠（い）を先立たね（巻十四・三三五三）

の如く大地名麁玉（引佐郡に近くまで麁玉村があったと言う）に小地名伎倍を置いたのは東歌の定石である。「立てて」は立って待たせているのであり、待っている人（ここでは汝と呼ばれている）の対手の女であることは言うまでもない。

何かの都合で今晩は訪ねて行けそうにもない男が「先にお休み」とやさしく歌ったものである。もう一首の

伎倍人の斑衾に綿さはだ入りなましもの妹が小床に（全三三五四）

も男の作で「入りなましもの妹が小床に」と素朴で露骨な表現を厭わないのも民謡の常である。又第三句までは序で、本意は四・五句にしかないのも、民謡の手法を示すものである。

所が防人等の歌の遠江出身のものを見ると、そこには例えば

畏きや命被（かがふ）り明日ゆりや草（かや）がむた寝む妹（いも）無しにして（巻二十・四三二一、長下郡物部秋持）

の如く「畏きや命被り」と防人としての任務の自覚が歌われている。勿論一方では「草がむた寝む」（「草」も「寝む」も共に東歌によく用いられる語であることは周知の通り）とか「妹なしにして」とか東歌と共通するもの

を残している。この顧みしない心と顧みせずにはおられない悲しさとの相剋を詠じた所に、防人歌の特色のあることは他にも屢々述べた所である。

我が妻も畫に書き取らむいつまもが旅行く我(あれ)は見つつ偲はむ（仝四三二七、長下郡物部古麿）

と妻を畫いて持って行きたい――写真はそれに較べると時間もかゝらず便利である。さきの大戦においても、如何に多くの若い人達が、父母や妻子の写真を胸に抱いて死んで行ったことであろうか。――のに、その暇のないのを歎いたものであるが、畫は集中この防人の歌に見られるばかりなのも皮肉である。或いは

我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影(かど)さへ見えてよに忘られず（仝四三二二、麁玉郡若倭部身麿）

の如く飲む井の水にでも映る面影を妻のものとして偲ぼうともするのである。猶この作者は東歌に見える麁玉の出である。更に

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧(さぎ)ごて行かむ（仝四三二五、佐野郡丈部黒当）

時々の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ（仝四三二三、山名郡丈部真麿）

などの如く父母を花として身近に置こうともするのであり、防人の父母や妻子を懐う心は既に遠江の防人によって、早くも歌い出されているのである。

花は東歌では「春に咲く藤の裏葉」（三五〇四）とか「橘の下吹く風のかぐはしき」（七三七一）とか歌われているけれども、何れも花を直接感賞しようとはしないのである。防人等の歌でも全く同様であり、色々な花の咲くことは認めており、花を大切にしようとする態度も「捧ごて行かむ」とする所に窺われはするものの、それは特定の花ではなく、ただ一般的な花を認めているだけで、小さくて携帯に便利なものとして之を利用しているに過ぎないのである。

その点は防人の歌も全く東歌の世界と同様である。

ついで駿河国の歌を見るに、東歌では五首中四首までも当然のことながら富士にかゝわりのある歌である。駿河の国の人々の富士に対する関心の深さを示すものと言うべきである。しかしそれは

天の原富士の柴山木の闇の時移りなば逢はずかもあらむ（巻十四・三三五五）

富士の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとへば日に及ばず来ぬ（仝三三五六）

霞ゐる富士の山傍にわが来なば何方向きてか妹が嘆かむ（仝三三五七）

さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如（仝三三五八）

などの如く、富士をただの柴山と見たり、妹の許を訪うのには長く遠い裾野の路をも厭わないとか、恋の激しさを富士の鳴沢に比すと言った具合で、富士の美しさをそのまま歌ったものは一首も見出せないのである。「天の原富士」と言っているのを見れば、彼らとても天空に聳える高嶺の姿を認めていた事は確かだけれども、未だその神々しさ秀麗さを讃仰する餘裕がなかっただけである。「霞ゐる富士の山傍」と言う表現にも、日本一の山を誇ろうとする気持などはなく、ただそこいらに幾らもある名もない山と同じに取扱っているのが見られるのである。

毎日柴を取る山であったり、妹の許に通うための長く遠い道に過ぎなかった富士山やその裾野は彼らの毎日の生活の場であり、餘りにも親しい存在であって、驚嘆の対象とはならなかったのであろうか。

富士の美の発見されるのは京師から赤人や虫麿の下向するのを待たねばならなかったのは寧ろ当然と言うべきである。

駿河の防人の歌にもわずかに一首だけれども

吾妹子と二人わが見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくもあるか（巻二十・四三四五、春日部麿）

と詠まれているのは多分富士山のことであろう。ここで富士を「恋しく」思うのは「吾妹子と二人」で見た富士だからであり、富士そのものの美しさを懐しんだものでない事は東歌の場合と全く同様である。

駿河の防人の歌として注目すべきは父母を歌ったものの八首もあるのに、妻を詠じたものの二首に過ぎないことである。

ここでは防人の公人としての立場は一首も見られないけれども、そのために彼等が他の国の防人達に比して惰弱であったとは必ずしも言えないのである。防人達が公の立場と私の立場とをよく承知していたことは駿河と上野の国の防人の歌に公の立場が歌われないだけで、他の国々の防人達は何れも「大君の命」を畏みながら、一方では父母や妻子を顧みずにはおられないのを歌っているのに見ても明かである。

駿河国の防人の歌には八首も父や母を歌ったものがあると言ったが、その中の一首

国巡る猟子鳥鴨鳧行き廻り帰り来までに斎ひて待たね（巻二十・四三三九、刑部虫麿）

には父母とも妹とも言っていないので俄かに断じがたいけれども、駿河の防人歌は父母（四三三七）を歌ったものに始り、次は母との別れを悲しんでおり、第三がこの歌で、以下四三四〇・四三四一・四三四二と何れも父母とか父とか母を歌ったものばかりである。

同じ場で共に詠じたものであり、一人が父母を歌えば、次々と父とか母とかを詠じないではいられないのである。同じ場でその中の一人が歌ったとすれば、必ずしも父母とはっきり言わないでも、それと理解されることは確かである。

そんな時にも中には

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち痩すらむわが妻かなしも（仝四三四三、玉作部広）

の如く少しく父母から転じて、子供を抱えて痩せる思いの妻の身の上を思い遣るものもあったが、次には又「我が父母は忘れせぬかも」（四三四四）と父母のことに戻り、その次には先に掲げた「吾妹子」（四三四五）を偲び、最後には又

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる（仝四三四六、丈部稲麿）

の如く「父母」で歌い納めているのである。

共同の場は民謡の好んで採用する所であり、一人が歌えば、他の者が歌い継ぐのである。

一人が父母を歌えば誰もが父や母を歌わずにはおられないのである。そういう意味では防人歌がまだ集団の歌、即ち民謡の世界から完全に独立してはいない事を物語るものとして興味がある。

伊豆国の歌としては東歌に伊豆の海（三三六〇）を序に用いた一首があるだけで、防人の歌――当時伊豆は相模に属していた――には一首もない。

相模国の東歌では足柄を歌ったものが圧倒的で、十五首中十首を占めている。しかし足柄を越えて旅行くのを歌ったのは

足柄の御坂畏み曇夜の吾が下延へを言出つるかも（巻十四・三三七一）

の一首だけである。峠とか坂とかには何処も恐ろしい神がいるので、人々は幣を捧げるとか心中の秘密を神に告白して、はじめて其処を通していただく事が出来ると信じていた。「足柄の御坂畏み」とはそんな当時の人々の敬虔な気持をそのままに表現した言葉であった。

又もう一首

我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か（仝三三六一）

は大和へ夫を送り出した妻の作で「まつしだす」は難解だが「杉の木の間」に立って待つ女の待ち遠しさを歌ったものであろうか。

もしこの待たれる人を防人に召されたものとすれば、三三六一の歌は後に残された妻の作と見るべきであろうか。

足柄山を歌った他の八首は何れもそこを生活の場として生きている人々のものであるのに、この二首だけ旅行く

者と残された者との気持を歌っているので、東歌と防人等の歌とを対照して眺めようとする今の私にはそんな想像もせられてならないのである。しかし胸中の秘密を大勢で行く場合にたとえ神の前ででも打ち明ける筈はないので、何かの事情で一人上京しなければならなかったのでもあろうか。

彼らの歌う足柄はあちこちに罠をしかける場所（三三六一）であったり、粟を蒔く所（三三六四）である。即ち毎日生活している所に外ならないのである。中には

鎌倉の見越の埼の石崩の君が悔ゆべき心は持たじ（仝三三六五）

の如く変らない心を誓う女の歌――誓い合わないでは不安なのが恋人の常であるが――とか、

ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか（仝三三六六）

の如く愛しく思う人を訪ねようとする男の徒渉できるかどうかと案じているものもある。

共に鎌倉を中心として歌われた民謡であり、前者は女の気持を、後者は男の心を歌ったもので、或いは問答の体をなすものかと考えられもするのである。

「待つ」のは女の常であるが、

薪樵る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつやあらむ（仝三四三三）

の歌では待っている――松の屢〻待つに懸けて用いられていることは周知の通りだが――との確かな言葉の聞かれない男の嘆きを詠じたものである。今では立派な住宅街となっている鎌倉山も、当時はただ松山ばかりで、人々の薪を取る所に過ぎなかった。

そのほか相模の東歌には「相模路の淘綾の浜の真砂」を「愛しく思」う「児ら」（三三七二）に比するものとか

相模嶺の小峯見かくし忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くる（仝三三六二）

の如く相模嶺――ここでは妹を思い出すよすがの山としている――をなるべく見ないようにして妹のことを忘れよ

うと努めて来たのに、心なく妹の名を呼ぶ人があって、私をおいおい泣かせてしまったとか歌ったものがあるに過ぎない。相模嶺は一般に相模の山々と解されているようであるが、それではどの山でも妹を思い出せるようで、よすがの山としては不適当だと私は思うものである。相模嶺と言えば相模第一の山であり、坂東太郎とか安達太郎山などと言う呼び方と同じだと考えるからである。従って私は相模嶺には大山を当てたいと思うのである。

「相模万葉」を執筆するに当って先日私も大山詣をしてみたが、実に立派な信仰のお山であった。先導師何某と記した看板の立った家が何軒もあり、講宿も昔ながらに軒を並べていた。そんな山であればこそ妹のよすがとするに相応しいのである。

従って私は陸奥国の東歌に見える会津嶺（三四二六）も又磐梯山を指したものとしたいのである。

猶この相模嶺の歌は或本の歌に

武蔵嶺の小峯見かくし忘れ行く君が名かけて吾を哭し泣くる

ともあって、武蔵にも同じような歌の謡われていたことを物語っている。地名を変え性の転換まで行ってあちらこちらと謡われて行くのが民謡の常であり、ここにもそれを示しているに過ぎないのである。ただ武蔵嶺については武蔵の山々と漠然と言ったものでなく、あの武蔵の山とたゞ一つを指したものと見たいのは相模嶺と同様であるが、それが秩父山を指すものであるかどうかは未だ実地踏査をしたことがないので確認できないのが残念である。

ついで眼を相模国の防人の歌に転ずると、三首ともすべて難波を出発する時に限られており、東歌とよく対照の妙を発揮したものとも言えるであろう。即ち

大君の命畏み磯に触り海原渡る父母を置きて（巻二十・四三二八、丈部造人麿）

八十国は難波に集ひ舟飾吾がせむ日ろを見も人もがも（仝四三二九、足下郡丹比部国人）

難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに（仝四三三〇、鎌倉郡丸子連多麻呂）

などの三首がある。第一首には防人歌の公私の両面を歌っており、第二・第三首には母とか父母を歌っている。第二の歌では「見も人」と言っていて、人は必ずしも明かにしていないが、第一首第三首と同じ場で同じ家郷への第二の別れを父母に託したものと思われるからである。相模の東歌に「子ろ」とか「妹」とかを詠じたものが多いのに対して、同じ国の防人歌に父や母のみを歌って、妹とか子らを歌っていないのも、又よい対照をなしている。

ここにも一人が父母を歌えば、第二第三の者もそれに応じて同じく父や母を歌わずにはおられない共同の場を思わないではおられないのである。

三

武蔵国の東歌には武蔵野が五首も歌われており、ここを生活の拠り所としていた人々の歌であることを示している。中でも

恋ひしけば袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ（巻十四・三三七六）

わが背子を何どかも言はむ武蔵野のうけらが花の時なきものを（仝三三七九）

の如く「うけらが花」の二首までもここ――もう一首（三五〇三）同じ東歌の中に歌われているが他には見られない。――に詠まれているのは注目せらるべきである。万葉植物図鑑によれば

山野に自生しやや日かげを好む多年生の草木である。茎は細く六十センチ～一メートル位に達し、葉はまばらに互生し硬質で、単葉複葉の二種あり、いずれも楕円形をなし、複葉は深裂して三～五葉より成っている。全葉縁辺に固い刺状の鋸歯を有して、全株ざらざらとした感じがある。十月始めごろ各枝頭に小形のアザミに似た頭状花を開く。花は白色または淡紅色の管状花冠を有して、其周囲に網状に分裂した苞葉をもっている。オケラは美しい花ではないが、秋の七草もハギを残してすでに終ったあとに、ひっそりと咲きいでたこの花に

は、なんともいえぬ親しみと愛すべき風情が感じられる。

と言われており、いかにも東国に相応しい雑草の花である。

そう言えば同じ武蔵国の東歌に

入間道の大家が原のいはゐ蔓引かばぬるめる吾にな絶えそね（仝三三七八）

と歌われたイハヰヅラは未詳であるが、同じ東歌の一首（三四一六）と共に又巻十四特有の雑草である。

東歌や防人歌に雑草的な性格を認め、その逞ましいエネルギーに動かされて家持の防人の悲別の歌となったとするのは高木市之助博士の「雑草万葉」の御説であるが、私も既に「防人歌と家持」に於いて少しく論じたことがある。

猶武蔵の東歌に

多摩川に晒す手作さらさらに何ぞこの子のここだかなしき（仝三三七三）

と歌われているのは多摩川沿いで調布としての布の晒された事を物語っており、常陸の曝井の歌（一七四五）と共に、東女の手仕事であったのである。

武蔵国の防人等の歌には

大君の命畏みうつくしけ真子が手はなり島伝ひ行く（巻二十・四四一四、秩父郡大伴部少歳）

の如く防人としての公私の立場を一首に詠じているのをはじめ、私的な悲別の歌を載せており、中でも注目すべきは

白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや（仝四四一五、荏原郡物部歳徳）

草枕旅行く背なが丸寝せば家なる吾は紐解かず寝む（仝四四一六、妻椋椅部刀自売）

吾が行の息衝くしかば足柄の峰延ほ雲を見とと偲はね（仝四四二一、都筑郡服部於田）

我が背なを筑紫へ遣りてうつくしみ帯は解かななあやにかも寝も（仝四四二二、妻服部呰女）

とか、更につゞいて

家ろには葦火焚けども住み好けを筑紫に到りて恋しけもはも（全四四一九、橘樹郡物部真根）

草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手と付けろこれの針持し（全四四二〇、妻椋橋部弟女）

とか、或いは

足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも（全四四二三、埼玉郡藤原部等母麻呂）

色深く背なが衣は染めましをみ坂たばらばまさやかに見む（全四四二四、妻物部刀自売）

などの防人とその妻との問答を四組も収めていることである。

第一組にあっては夫は妻を白玉のようにいつも見たいと言い、妻は夫の旅での丸寝を思って、自らも紐も解かずに寝ようと言う。第二組にあっては夫は後に残る妻の歎きを思い、妻は夫を筑紫へ送り出したら、帯も解かずにそのまま寝ると歌う。但しこの妻の歌は昔年防人歌に

わが背なを筑紫は遣りて愛しみ帯は解かななあやにかも寝む（全四四二八）

と全く同様であり、妻の告女が昔年防人歌を自らの想いの代用にしたものと思われるのである。他の作を用いて自らの想いに代えようとするのは民謡を歌う人々の常である。防人やその妻達が東歌と同じ地盤の人々であることをここにも如実に物語っているものである。

第三組は夫のたとえ葦火を焚く貧しい生活でも、筑紫へ行けばきっと恋しく思うに違いないと言うと、その妻は夫の世話を何一つしてやれないのを思って、針を用意しては「我が手と付けろ」とやさしく歌うのであった。「我が手と付けろ」は「これを私の手と思って」などともって廻った言い方ではなく、私が傍にいないので、御自分で夫に呼びかけたものと私は解したいのである。

第四組は足柄での最後の一瞥を家郷に向かって与えようとするに当っての袖振りを中心として問答は構成せられ

ている。公害などに全く悩まされることのなかった当時と雖も、いくらその衣を色濃く染めたにしても、とても武蔵の埼玉郡から足柄で夫の袖を振るのをそれと認められる筈はないのである。それでも夫は袖を振らずにはおられない――妻にそれが見えるか見えないかは問題ではない。人麿は死んだ妻にさえ袖を振って別れている。――のである。妻は又あたかもそれが見えるかの如く、実際には色染めではないのに、色濃く染めておけばよかったと歌わずにはおられないのである。

素朴な東男と東女との別れにもこんな虚構は既に見受けられるのである。都にあっては山城への行商にでも出かける徒歩の夫に「まそみ鏡に蜻蛉領巾負ひなめもちて馬かへ我が夫」（巻十三・三三一四）と言ったやさしい妻に対して

馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし馬はなくとも我は二人行かむ（三三一七）

のように、夫も又よく妻の純情に応えると言った名も無き男女像が既に一作者によって造型せられている時代である。防人等の問答の歌――さきの山城の男女像もたまたま問答に属するのは偶然とは思われないのである。この事については既に早く触れたので、ここには詳述しない。（注一）――にも「袖の別れ」を中心として多少の虚構の敢えて行われているものとするのは私のみのさかしらであろうか。

しかも第二組から第四組まではつゞいて掲げられており、一人が妻の歌と共に差し出せば次々と同じように妻の歌を併せて出そうとするのである。ここにも防人等の歌の共同の場を思わずにはおられないのである。

又同じ武蔵国の防人等の歌にも

赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ（巻二十・四四一七、豊島郡椋橋部荒虫の妻宇遅部黒女）

の如く馬を放牧してしまって夫の出発に当って馬で行かせることのできないのを歎くものもあれば、

枕刀腰に取り佩き真愛しき背ろがめき来む月の知らなく（仝四四一三、那珂郡檜前舎人石前の妻大伴部真足女）

の如く出発に当って早くも夫の帰還の姿を眼に描いている妻もあった。

武蔵国の東歌に特に武蔵野を歌ったものが多く、その地出身の防人等の歌に、共に夫妻の作を載せるものの幾組もあることは、彼此の対比に於いて注目すべきものがある。

次に上総国の東歌には巻頭に載せられた

夏麻引く海上潟の沖つ渚に船はとゞめむさ夜更けにけり（巻十四・三三四八）

なる一首――但し海上については紀にも上つ海上（千葉県市原郡海上村）と下つ海上（銚子市の西の海上郡）とを記しているので、下総の下つ海上を採る説もある――と、相聞の部に載せられた

馬来田の嶺ろの篠葉の露霜の濡れてわ来なば汝は恋ふばそも（巻十四・三三八二）

馬来田の嶺ろに隠り居斯くだにも国の遠かば汝が目欲りせむ（仝四四八三）

など、共に馬来田を初句とするものとの三首があるばかりだが、上総の防人等の歌には公私の立場を歌った多くの作品で賑かである。即ち

大君の命畏み出で来れば吾に取り付きて言ひし児なはも（巻二十・四三五八、種淮郡物部龍）

筑紫辺に舳向かる船の何時しかも仕へ奉りて本郷に舳向かも（仝四三五九、長柄郡若麻続部羊）

などの如く防人の公私の心情を一首の中に歌ったものもあれば、

道の辺の荊の末に這ほ豆のからまる君を別れか行かむ（巻二十・四三五二、天羽郡丈部島）

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ（仝四三五七、市原郡刑部直千国）

などと妹との別を歎いているものもある。中には

家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける大刀になりても斎(いは)ひてしかも（仝四三四七、日下部使主三中の父の歌）

たらちねの母を別れてまことわれ旅の仮廬に安く寝むかも（仝四三四八、日下部使主三中）

の如く防人の出発に際しての父との問答歌も載せられている。父の歌に対して父のことを言わずに母の事を歌っているのは「旅の仮廬」に一人旅寝することと関係があり、まだ母が恋しい程の若い防人だったのであろうか。父をも母と同じく愛していたことはもとよりである。

我が母の袖持ち撫でてわが故(から)に泣きし心を忘らえぬかも（仝四三五六、山辺郡物部乎刀良）

の歌にも又母を忘れられない若さがあるようである。又

旅衣八重着重ねて寝ぬれどもなほ膚寒し妹にしあらねば（四三五一、望陀郡玉作部国忍）

は東歌に見える馬来田郡の出身の防人の歌であるが、昔年防人歌に

小竹が葉のさやぐ霜夜に七重かる衣に益せる子ろが膚はも（巻二十・四四三一）

とあるのを借用して己が想を代弁しているものである。昔年防人歌が何度もそのまま借用せられたのによっても、未だ自他の作の間に何らの隔てをおかなかったおおらかな時代であり、民謡の心を心とする人々だったからである。

四

又下総国の東歌では真間の手児名（三三八四、三三八五）を詠んだものとか

足(あ)の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋止まず通はむ（巻十四・三三八七）

の如く継橋を高い足音を立てずにこっそりと渡ることのできる駒があれば――それは実現不能のことであるが、それだけ人言をはばかるこの男の気持がよく出ている――と歎いたり、

鳰鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも（仝三三八六）

と新嘗の祭の晩にほとほとと訪ねて来たのを「その愛しき」とはっきり聞きわけているのも、共に民謡らしい人々に共通の想いを歌い上げたものと言うべきである。

下総国の防人等の歌は東歌に較べて二・五倍もの多くを見ることができる。公的な「大君の命」と共に、私的な想いをも併せて歌ったものは

大君の命にされば父母を斎瓮と置きて参ゐ出来にしを（巻二十・三三九三、結城郡雀部広嶋）

大君の命畏み弓の共さ寝か渡らむ長きこの夜を（仝四三九四、相馬郡大伴部子羊）

などの如く並んでおり、同じ発想の場を持った事を如実に示している。又相ついで神を引合に出したものとして

国々の社の神に幣奉り吾が恋ひすなむ妹がかなしさ（仝四三九一、結城郡忍海部五百麻呂）

天地のいづれの神を祈らばかうつくし母にまた言問はむ（仝四三九二、埴生郡大伴部麻与佐）

などがあり、一方が妹を思っているのに対して他方は母に言問うことを祈っている。何れも防人達の心を大きく占めたものであることは他国の防人の歌に見ても明かである。

猶同国の防人の歌には

潮舟の舳こそ白波俄しくもおほせ給ふか思はへなくに（仝四三八九、印波郡丈部直大麿）

の如く急に防人に徴発されたのに驚いた風の歌（歌を奉れとの意に取っているものもあるが防人として出発の折の作と思われる）のあることと共に

暁の彼は誰時に島影を漕ぎにし舟のたづき知らずも（四三八四、海上郡海上国造他田日奉直得大理）

の如くいかにも東歌の巻頭の雑歌に当る所に載せられている上総国の歌

夏麻引く海上潟の沖つ渚に舟は泊めむさ夜更けにけり（巻十四・三三四八）

なる一首とどことなく不安を漂わせている所に相通じるものがある。一方が暁方であるのに、他方は夜更であるの

が違うのみである。東歌の方には上三句まで他にも

夏麻引く海上潟の沖つ渚に鳥はすだけど君は音もせず（巻七・一一七六）

の如く同じものがあり、第五句も又

吾が船は比良の港に漕ぎはてむ沖へなさかりさ夜ふけにけり（巻三・二七四、高市黒人）

吾が舟は明石の湖（みと）にこぎ泊てむ沖へなさかりさ夜ふけにけり（巻七・一二二九）

の如く同じ詞句で終るものを二つも見ることができる。作者の明かなものから作者不明の民謡へ、更に或る民謡から他の民謡へと、次々と流布して行くに従って、少しずつ変貌する姿を、ここによく認めることができるようである。

ただし防人の歌の方は一般に難波を出帆――難波を船出する時には海路を行くために又新たな感懐を抱くのは当然である。私が前に第二の出発と言ったのはこのためである――するに当って、先発の船の島影に隠れて行ったのに頼りなさを、感じたものとせられている。

それにしてもこの歌の発想には東歌的な序詞（初句より四句までもの）が用いられているのに注意すべきである。即ちこの歌の主想は「たづき知らずも」にあるのであり、相聞の思いを歌ったものと思われるのである。しかし防人がここで必ずしも相聞の思いのみを歌ったものでないことはつゞいて歌われた

行こ先に浪なとゑらひ後方（しるへ）には子をと妻とを置きてとも来ぬ（仝四三八五、葛飾郡私部石嶋）

の歌が続き、高浪の立たない事を願っているのに見ても明かである。即ち前の得大理の歌（四三八四）は東歌的の発想をしながら、単なる相聞の思いのみではなく、前途の不安を示すのにも利用したものでもあろうか。ここにも東歌と防人の歌との共通の発想形式とその転用をも見逃しえないのである。

次に常陸の国の歌を見るに、東歌では十首中九首までも筑波山を材料としたものばかりであり、如何に彼ら東国

の人々、特に常陸の人達に取ってこの山が大きくかれらの生活の中に位置を占めていたかを示している。

しかしこの山に霞のかゝって動かないのを歌っているからと言っても、それは単なる序としてであって、家の前を通り過ぎえないで「息衝」（三三八八）いている若者を描くのに利用しているまでである。又この山に鳴く鷲は珍らしい素材であるにも拘らず、思う人に逢うこともなく「泣き渡」（三三九〇）る自らに比せられるだけである。或いは

筑波嶺の彼面此面に守部据ゑ母い守れども霊そ逢ひにける（巻十四・三三九三）

の如く三句までを序として娘を守る母に比しているのも、猟に親しむ彼らの生活を反映しているものと言えるであろう。或いは筑波の山に立つ月（三三九五）とか、この山の茂った「木の間」（三三九六）から立つ鳥を写しているものもあるけれども、何れもそのものを詳しく歌うのではなく、それから主想に転じようとするものばかりである。しかしそれらの序とか譬喩にでもこれらの風物の見受けられることは一入われわれに東国らしさを感ぜしめるのに役立っていることは確かである。又

筑波嶺の岩もとどろに落つる水よにもたゆらに吾が思はなくに（全三三九二）

なる一首はさきに掲げた相模の東歌の

足柄の土肥の河内に出づる湯のよにもたよらに子らが言はなくに（全三三六八）

と著しく類似しており、地名を変え湯を水に転じ、女の気持を男の心とするなど、民謡の伝播流行して行く姿をよく今日に伝えるものと言うべきである。恋人達に取って不安は対手に対しても自らに対してもある筈である。そんな不安な気持を歌ったのがこれらの歌であった。

筑波山の歌以外には常陸の東歌としては

常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれあどか絶えせん（全三三九七）

の如く浪逆の海（今も浪逆の浦としてその名を残している所があるが、この辺りはひどく昔と面影を変えており、そのまま当時を偲ぶ事の出来ないのは残念である。）の玉藻を引合として、自らの心の変らない事を示している歌が一首あって、山や海を生活の場としていた彼らの姿を思い浮べるに相応しいものである。

転じて常陸の防人の歌を見ると、先ず長歌のあるのに注目せられる。しかも

足柄の　み坂たまはり　顧みず　吾は越え行く　嵐をも　立しや憚る　不破の関　越えて吾は行く　馬の爪　筑紫の崎に　ちまり居て　吾は斎はむ　もろもろは　幸くと申す　帰り来までに（巻二十・四三七二、倭文部可良麻呂）

の如く「顧みず」嵐をものともせず、足柄の御坂を越え、不破の関を越えて筑紫にまで至る雄々しい防人の姿を示すと共に、かの地にあっては家人達の平安を祈ると歌っていて、家持の長歌を小型にしたような感じがする。

東の国の人々はとても長歌などは詠めないとする立場からは、誰かの作を可良麻呂が借用したものとも考えられるけれども、東歌とか防人歌に自然観照の作を排除しようとする考と共に私の採らない所である。防人達が一応歌を口吟むだけの教養を身につけていたとすれば、短歌より一寸長い小長歌をものすることも、さして困難とは思われないからである。更に又この長歌の後半に述べられた願いはたまたま

久慈川は幸くあり待て潮船に真楫繁貫き吾は帰り来む（仝四三六八、久慈郡丸子部佐壮）

なる一首と相似ている事も――もとより前者は筑紫での思いを、後者は出発に際して歌ってはいるものの、共に家郷を恋うる点では同じである。――この長歌の防人の作であることを証拠立てているようである。一方は「もろもろ」と人々を中心とし、他方は「久慈川」と川の名を挙げてはいるけれども、故郷の山や川はそこに残された家人を思うに足るものである事はここに説明を待つまでもない。

又「もろもろ」とぼんやり概括しているのも「父母妻子」であることは他の多くの防人歌が保証する通りである。

常陸の東歌に筑波山を歌ったものの殆んどであることは前述の通りであるが、防人の歌にも又

我が面(もて)の忘れもしだは筑波嶺をふり放け見つつ妹は偲はね（全四三六七、茨城郡占部少龍）

筑波嶺のさ百合(ゆる)の花の夜床(ゆ)にもかなしけ妹ぞ昼もかなしけ（全四三六九、那賀郡大舎人部千文）

橘の下吹く風の香ぐはしき筑波の山を恋ひずあらめや（全四三七一、占部広方）

などの如く筑波山を取挙げたものが多いのであり、ここにも東歌と防人歌とに共通のものを見逃しえないのである。第一首は筑波嶺を我と思って偲べと言い、第三首では筑波の山を家郷を思うよすがとする自らを歌ったものである。山――特に故郷で親しんだ山であれば殊更――や雲や月は共にどちらからも対手を思うのに利用されるのが常である。

第二首もいつもこの山に出入した人の作であり、百合の花も単に「夜床(ゆ)」を導き出すのに使用されているに過ぎないけれども、自ら妹の美しさをも間接的に示す役目を果しているようにさえ思われもするのである。猶この歌は巻十四に収められても少しも不自然を感ぜしめないほど、東歌的な発想の姿を見せている。防人歌の地盤を示す好例と言うべきである。

又難波津を出帆するに際して「妹に告げこそ」（四三六三、四三六五）と二人も妹を思ったり、

常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ（全四三六六、信太郡物部道足）

の如く雁に文を托したいと幼く歌っているのも――たとえ雁信の故事は知らないにしても――彼らのやさしい心根を示すものと言うべきである。

しかし彼らとても他の防人達に何ら劣ることなく公の任務を自覚していたことは

あられ降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に我は来にしを（全四三七〇、那賀郡大舎人部千文）

の一首のあることによっても明かである。猶この歌は前出の「さ百合の花」（四三六九）の作者と同一人の作であるのを思うべきである。「顧みない」心と「顧み」する心とは共に防人等の歌の各一面を示したものに過ぎないのである。

五

以上は東海道の国々――猶その中の武蔵は東歌の当時は東山道に属していたとは言っても、役人の通過に当っても、東海道筋の人も武蔵を通る事もあったので、便宜上東海道の中に部類されているものとも考えられる――の東歌と防人歌とを対照して眺めたのであるが、つづいて東山道の国々の歌を較べてみたいのである。

先ず信濃国の歌には東歌には四首、防人歌にも三首しか見えないが、何れも佳作が多いようである。

東歌では

信濃道は今の墾道刈株に足踏ましなむ沓はけ吾が背（巻十四・三三九九）

と新開の信濃道――信濃の方へ下る道を言う。信濃からの帰りは大和道である。近頃は東名高速とか京葉道路とかと大体両者を対等に取扱っているのはよいにしても、どちらへ向かっているのか分らない不便がある。――を行く夫に履物を履いて行くようにとやさしい注意を与える歌もあれば

人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児の言な絶えそね（仝三三九八）

のようにただ一人の石井の手児を思う若い男の歌もある。思う人ただ一人を偲ぼうとするのは恋人に共通のものであり、そこに民謡の基礎は置かれているのである。又

信濃なる筑摩の川の小石も君し踏みてば玉と拾はむ（仝三四〇〇）

にも君を思う心がよく窺われるものだが、筑摩川には昔も今と同じように大きな石もゴロゴロと川の中にころがっていたことであろう。

作者の小石を取り挙げた気持には小さなものを挙げて、それさえもと言ったものである事はもとよりだけれども、玉との関係でここでは特に選ばれているのである。

信濃の東歌は男の歌も女の歌も心を引かれるものばかりである。

この国の防人達も又東歌に劣らず、自らの公私の立場を巧みに詠じている。

大君の命畏み青雲の棚引く山を越よて来ぬかも（巻二十・四四〇三、小長谷部笠麻呂）

の如くいくつもの山々――そこには雲が棚引いて、家郷に残して来た人々を思い出させた筈だが――を越えて来た苦しい旅も防人としての任務のためであるが、中には

韓衣裾に取りつき泣く子らをおきてそ来ぬや母なしにして（仝四四〇一、小県郡他田舎人大嶋）

の如く裾にすがりつく母もない子を後に残して出発したものさえあるのである。この防人のために誰しもその悲運を歎かずにはおられないであろう。

ついで上野国には東歌が非常に多い。中でも伊香保の歌の多いのが目につく。

或いは伊香保の山に「降ろ雪」（三四二三）とか、伊香保の沼に植えた子水葱（三四一五）とか、井提に「立つ虹」（三四一四）を材として歌ったものもあるけれども、

伊香保嶺に神な鳴りそね我が上には故はなけども子らによりてそ（巻十四・三四二一）

の一首にやさしい男の心を歌ったのに読者は心を引かれずにはおられないであろう。東男にはやさしい心の持主が多かったようである。

阿蘇地方は山地で麻の栽培が今日も盛に行われている。東歌にも

上つ毛野安蘇のま麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（全三四〇四）

の如く背丈より長い麻の束を抱える生活の片隣をその序に巧みに採り入れているものもあれば、

上つ毛野安蘇山つゞら野を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ（全三四三四）

の如く野に一面に延び広がっている蔓草をそのまま対手を思う自らの心に利用したものもあって、山野を生活の場とした人々の歌として相応しいものである。

上野の国の東歌には又

日の暮に碓井の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ（全三四〇二）

の如く東山道の人々は碓井峠を越えて旅に出たことを示している。前に述べた通り武蔵の防人の歌に

足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも（巻二十・四四二三、埼玉郡藤原部等母麻呂）

と歌われているのと相通ずる場面であって、防人の作ではないかと思われるのである。

又上野国の女の歌としては

上つ毛野安蘇の舟橋取り放し親は放くれど吾は離るがへ（巻十四・三四二〇）

と親の反対に抗してまでも自らの決意を変えようとしないことを歌った力強い作品もあれば、

上の毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなもひとりのみして（全三四〇五）

の如く「ひとりのみ」で「子ら」に逢おうと願うものもある。但しこの歌は或本には

上つ毛野小野の多杼里があはじにも背なは逢はなも見る人なしに

となっており「子ら」が「背な」に「ひとりのみして」が「見る人なしに」と多少の詞句の相違と男女の入替えとが見られるのである。ここにも又民謡の伝播の姿を見ることができるようである。

更に上野国の防人の歌としては四首が見られるだけであるが、

ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（巻二十・四四〇七、他田部子磐前）

の如く碓氷の坂を越えて旅行かむとする時（注二）にあたって妹を恋しく思っているものであるが、之も女の方から歌えば東歌の

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ（巻十四・三四〇二）

ともなるのであり、ここにも防人歌の東歌との交流を見逃しえないのである。

難波道を行きて来までと吾妹子が着せし紐が緒絶えにけるかも（巻二十・四四〇四、上毛野牛甘）

吾が妹子が偲ひにせよと着けし紐絲になるとも吾は解かじとよ（仝四四〇五、朝倉益人）

等は何れも吾妹子の付けてくれた紐を歌っており、場を同じにした防人歌の製作事情を知ることができる。又

我が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げやらまくも（仝四四〇六、大伴部節麻呂）

の如く文字通りの草枕の旅を「苦し」と今日にまで素直に伝えているものもある。

次に下野国の東歌は僅か二首で

下つ毛の三毳（みかも）の山の子楢のすまぐはし子ろは誰が笥（け）か持たむ（巻十四・三四二四）

の如く子楢のように可愛いい子を必ず我がものと強く信じているものもあれば

下つ毛野安蘇の河原よ石履まず空ゆと来ぬよ汝が心告（の）れ（仝三四二五）

の如く安蘇の川原（今は秋山川と言って小石の多い川原が見られる）を通って――途中小石の多い歩きにくさにも気付かなかったのはただ夢中で来た証拠であるが――空を飛ぶように急いでやって来た自分を示して、対手の決意を迫ったものもある。三毳山の神社の辺には今も若木の楢の葉が明るく日に映えており、秋山川の川原も又小石の多い歩きにくさは今日からも之を偲ぶことができて、これら二作の共にこの土地に生きた人々の実感であることを示している。

これに対して下野の防人の歌は十首もあって甚だ賑やかである。勿論公の立場とか私の感懐とかを歌っていることは他の国の防人歌と同様であるが、この国の防人達の歌で特に目立つのは難波を出発する時の気持を歌ったものの多いことである。即ち

難波門を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲そ棚曳く（巻二十・四三八〇、梁田郡大田部三成）

はその一首であるが、海上から遙か東方に見える生駒山にかゝる雲を詠んでいるのに注目すべきである。

雲は月と共に遠くの人を思うよすがとなるものであるから、或いは之によって家人を偲んだものかも知れない。しかし東歌にも既に

面白き野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひば生ふるがに（巻十四・三四五二）

の如く古い草に混って新しい草の萌え出て来る早春の野の景に心を寄せているのをみれば、防人の歌にも――彼らは狭い東国の地から出て、長い苦しい旅を続けて行ったのであり、その結果は当然自然を眺める目も更に深まって行ったに違いない――この歌のように海上から見える生駒高嶺の雲を歌ったり、更に上総の歌に同じ難波にあって

外（よそ）にのみ見てや渡らも難波潟雲居に見ゆる島ならなくに（巻二十・四三五五、武射郡丈部山代）

の如く難波潟の好風に接することの出来ないのを歎く者のあるのも又当然と言うべきである。

東国人だからと言ってどんな場合にも自然の美しさを歌わないと決めてかかる方が間違いである。

時には霜夜の笹のさやぎに一入と寒さを感じたり、筑波の百合や橘の下を吹く風にも心を留めている彼らである。どうして防人達は生駒の雲や難波潟に心を動かしては悪いのであろうか。

すべて風流は都の人々の独占物であるかに考え、霍公鳥の歌が東歌の中にあればすぐ目に角を立て、難波潟の好風は防人などの関心事となる筈はなく独り都の風流士達の詠ずべきものとするのなどは、所謂教養人の錯覚と言う

べきであろうか。

下野国の防人の歌には又かって人々に愛誦せられたことのある

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で発つ我は（仝四三七三、今奉部与曾布）

の如く防人の公的立場を歌い挙げたものを第一とし、

天地の神を祈りて征矢貫き筑紫の島をさして行く吾は（巻二十・四三七四、大田部荒耳）

が第二に続いている。共に製作の場を同じくしているのを知りうるばかりでなく、又下野国の防人歌を総括するに足るものである。

第三首目にはじめて

松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりしもころ（仝四三七五、物部真島）

の如く私的な家人の事に及び、「母刀自」（四三七六）とか「父母」（四三七八）とか「母が目」（四三八三）の如く、家人とか父母を歌ったものが多く、妹を口にするものの一人もいないのも、この国の防人歌の特徴である。

次に陸奥国の歌としては東歌四首のみで防人の歌は見られない。

安達太郎山を歌い出した持つものの二首（三四二八、三四三七）あることや

会津嶺の国をさ遠み逢はなはば偲ひにせもと紐結ばさね（巻十四・三四二六）

と会津嶺（磐梯山と思われる）を歌っているのも、山国の人々に愛誦せられた事を物語っている。ただ

筑紫なる匂ふ児故に陸奥の可刀利をとめの結ひし紐解く（仝三四二七）

は陸奥人の作であるために、この国に属してはいるけれども、明かに之は筑紫での作であり、或いは陸奥出身の防人の歌かとも考えられるのである。

六

東歌には未だ民謡の域を出ないものが多く、富士も薪を取る柴山に過ぎず、筑波も鶯の鳴くただの山であった。未だそこには梅も桜――ただ「花散らふこの向う峯」（三四四八）と歌われたのはどう見ても桜としか思われない。――も萩の歌さえも一首も見当らない。しかし「道の辺のうまら」に這いからまる豆にも注意を払っており、谷から峰にまで延び広がった玉蔓をも見逃してはいないのである。彼らが時に

面白き野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひば生ふるがに（巻十四・三四五二）

なる歌に早春の野の美しさを発見したからと言って、都人士の作などと騒ぐ必要はないのである。古草の中から新草の萌え出すのを面白いものとするのは、いつもそれを眺めて来た彼ら田園人にして始めて見出だされる美しさだからである。ここでは都の人のように行きずりに歌ったのではなく、野焼きに当った今までの経験から歌い上げているのである。「野をばな焼きそ」と言ったからとて必ず都人士が農夫に命じたものとは限られない。古草と共に新草の萌え出すのを面白いとするのは、眼の前にある風景についてではなくて、過去の経験から将来を見透して歌っているのである。都の人の経験と言うよりは東国人の生活に屢〻見受けられた筈である。

或いは又

信濃なる須我の荒野に霍公鳥鳴く声聞けば時過ぎにけり（仝三三五二）

と霍公鳥を利用したからと言って、何もこの鳥を東歌の世界から追い出す必要もないのである。

霍公鳥は都の人達の風流のためにのみ存在するものではなく、かえって酒屋にも豆腐屋にも遠い山家の方にこそしきりに鳴くものである。東の国の人々がかまびすしく鳴き立てるこの鳥から自らの主想を導こうとしても何ら不思議はないのである。

又東歌は人々の共通感情を歌った民謡が主であるのに、防人歌には一応作者の名をも明かにしている。

防人歌は作者を明かにしているとは言っても、東歌と同様にその国々の歌によって集められている。東歌には序詞が好んで用いられ、主想は簡単な場合が多い。或いは地名を変え、歌詞に多少の動きを見せて、各地で歌われたようである。

或いは男の歌を女の歌にしたりして性の転換も行われている。或る時には男の気持を歌えばよかったのに、他の場合にどうしても女の心としなければならなかった証拠である。

防人歌には序詞の見られないものも少くない。序詞のない事は三十一文字のすべてを自らの思いによって占めさせようとするものである。集団的な共通感情を歌うのでなくて、一人一人の思いを述べようとすれば、そうなるのが当然と言えるであろう。

防人の歌に公私の両面をはっきりと歌いわけているのも、彼らがそれぞれ自らの立場をはっきりと認めている証拠である。

しかし防人歌にもまだ共同の場での発想にかゝずらっている所があり、一人一人が単独に個性的な歌をものしているものとは言えないのである。一人が父母を懐えば他も之に倣い、一人が妹を口にすればそこにいる人は次々に妹を偲ぶ歌を作ると言った具合である。

両者は共に東の国々を生活の根拠としながらも、防人に出で発った人々は更に広い世界を眺め、新しい旅の経験も積んでいるのである。物を見る眼にも自ら相違の見られるのは当然である。

防人の歌には「橘の下吹く風」（四三七一）を香ぐわしいとするものもあって、東歌の「須賀の荒野」（三三五二）の霍公鳥と共に、彼らも又風雅な世界にも少しづつ眼を開こうとしているのである。

防人の歌に筑波嶺の「さ百合の花」（四三六九）を序とするものの見られるばかりでなく、更に生駒の山に立つ雲（四三八〇）を歌ったり、難波潟の好風に接しようとする者（四三五五）の現われるのも又当然と言うべきであ

ろう。

東歌も防人歌も多くは東の国々を背景とした人々の作であり、共に谷や野に這う蔓草にも似た野性の力強さとか素朴なやさしさを示すものであるが、東歌の多く集団感情を歌った民謡の世界に留っているのに対して、防人歌は東歌よりも一歩文学に近づいているものと言えるであろう。換言すれば防人歌は多分に共同の場を持ちながらも、東歌を培養土として咲き出でようとする小さな文学の蕾とも言えるようである。

注一、拙著「万葉集に於ける表現の研究」（風間書房）所収「問答的歌謡の一傾向」参照

注二、「万葉」（昭和三十年十月号）所収春日和男博士「碓氷の坂を越えしだに」参照

（昭和・四七・一・一二）